



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 障害のある子から学ぶお金と教育の心構え

講演：住山 志津枝氏
レポーター：赤堀 薫里

『お金で学ぶさんすう』の住山です。私は普段障害のある子どもを専門に教育を行っています。なぜはじめたかという、私の子どもに障害があるということが一歳くらいの時にわかったからです。始めは泣き暮らしましたが、いろいろな人の支援を受けながら、自分の子どもを将来自立した人間にしなければならぬと心を決めました。その時に何が重要かという時に、お金の教育が必要だと思ったのです。世の中に就労支援は数多くあるけれど、働いて稼いだお金をどのように使うのか、管理するのかということ、障害の特性に合わせて教えてくれるところが全くありません。そこで自分で始めようと思いました。そこからファイナンシャル・プランナーの勉強も始めました。

実務経験の必要性も感じ、また将来、学校教育にも入ることを目標としていたので、教育委員会でボランティアとしてお世話になりました。その中で気づいたことが、一桁の引き算、足し算はできるけど、お金になると全く計算ができない子、逆にお金の計算はできても一桁の計算もできない子がいるということでした。なぜ同じ数、同じ計算でありながらこんな差が出てしまうのか。そこを追求しはじめました。なおかつ、お金を使って数や計算を学んだら、今の暮らしにも役立つし、将来の生活にも役立ちます。一石二鳥ではないかと思い始めました。



教育基本法には『職業および生活との関連を重視しましょう』と謳っています。今の教育は職業を意識していますが、生活も意識したらもっと子ども達にとってわかりやすい教育ができるのではないかと思います。私たち『おかねで学ぶさんすう』でお料理教室をやっているのは、ひとつに、一月の家計のやりくりの最小単位だと思っているからです。1回の調理実習を1日3回やったら1日の生活費に近づく。それを30日続けたら一月のやりくりにつながる。それにプラスお医者さん代や、衣服を買うお金を足せばいい。一年後になっても一生分になっても、収入の範囲内でやりくりをするという考え方は変わらないと思います。ただ、将来の年金はいくらもらえるのか、老後資金はいくら必要なのかということは、予想も入るし金額も大きくなるので専門家を頼っていいのではないの



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

かと思います。大人でも人に頼るという姿勢が必要だと思います。

お料理教室の先生をしていますがよく失敗します。でも失敗しても最後まで諦めない姿勢を学んでほしい、失敗したらどうすればいいのかお手本として自分を見てもらいたいです。そのことで子どもたちが安心してチャレンジができる意欲を育てたいと思っています。

学校算数は、概念を学習しています。それを生活算数は具体的なものに落とし込んでいきます。その違いが、学校算数と生活算数との違いです。お金の計算は判断の指標にすぎません。お金のやりくりは、自分自身の価値観に基づいた判断そのものです。収入の多さと幸せは比例しません。それは、自分自身の幸せがきちんと明確化されているかどうか。明確化されていたら、『自分はお金を使ったら幸せだから、ここにお金を使おう、他のところは節約しよう』と判断ができます。

『特別支援教育は全ての教育の原点だ』ということ、特別支援学校の先生に教えてもらいました。まず、大人も子どもも障害があるなしに関係なく、お互いに学び合う環境が支援学校はすごくできているなと思います。知識や心構えを学ぶことも、今も役立ちますし、将来もずっと役立っていきます。私たちのやっていることは、私たちだけでは無理です。教員も保護者も地域の方もみんなが力を合わせて、共に子どもたちの子育て環境を育めたらいいなと思います。

講演ではファイナンシャル・プランナーを保健室の先生に例えたわかりやすい説明や、実際に授業で行う『お昼のメニューを考える』ワークショップを行いました。ワークショップを通じて、学校の勉強がなぜ大切なのか、お金のやりくりの基本が学べるプログラムとなっていました。始終、熱い思いが伝わる講演でした。



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 住山志津枝氏とのフリーディスカッション

講演：住山 志津枝氏
レポーター：赤堀 薫里

参加者 | お父さんとお母さんが好きなモノを買っているのを見て、子どもが駄々をこねるでしょ。私は娘と孫のやりとりを見て、すぐ買ってあげようとしてしまうのですが、実は葛藤しています。

住山 | 今日は、好きに買って良い日だということをはっきりとわかってあげる。『今日は必要なものしか買わないから、おやつを買わないよ』と、最初の予告で言うことが必要だと思います。やはり楽しみも必要なので、きちんと分けてわかってあげる。すると、使い分けがあるということ、子どもたちはだんだん学んでいくのではないかと思います。



参加者 | 子どもは、親が好きなモノを買うと思っていますよね。

住山 | 子どもたちにとって何がわからないのかというと、前は『買っていいよ』と言われたのに、今日は『買ってはだめ』という場面の違いがわからない。だから事前に『今日は何々を買います』ということ伝えてあげることが大事です。『お財布の中にはお金があるのに買ってくれない。ママはこっそりお菓子を買っているみたい』ということを知っていますのでね。予算というモノをわかってあげる。なおかつ必要なモノと欲しいものがあるということをはっきりとわかってあげることが大事だと思います。

参加者 | それでも駄々をこねられたら。

住山 | 我慢をさせる。厳しく。絶対折れません。そうしないと将来その子のために良い教育ができないと信じているので、そこを貫き通すこと。大人の方が約束を守ることが大事だと思います。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | 必要なものと欲しいものとの基準は、大人と子どもでは違いますよね。どうやってすり合わせたらよいですか？

住山 | 私の場合、文房具だったら、お母さん文具店という仮想店舗をつくり、最低の基準というものを教えています。例えば 50 円の消しゴムがあれば、300 円位するキャラクターの消しゴムもあります。『ここで買えば消しゴムは一個 50 円だけど、これと違うもっとかわいいものが欲しいのであれば、自分のお小遣いから買ってね。最低必要な基準はここですよ！』ということを教えてあげるようにしています。

参加者 | 子どもは、お小遣いを管理しているのですね。

住山 | 子どもには、自分のお小遣いを管理させています。最初は、文房具とお菓子というところから始めました。一ヶ月の見通しが障害のある子どもたちには特に難しいです。まず一週間という単位から始めます。『一週間で必要なものの中で、文房具代は取り分けておきましょうね。残りのお金はお菓子を食べてもいいですよ』という約束をしますが、使い込みをします。そこで使い込みをしても絶対に助けない。

家では、文房具のお金、お菓子のお金と分けておいたのに、最初だったので嬉しかったのでしょね。文房具代までお菓子のお金として使い込みをしてしまいました。そしてノートが買えなくなってしまいました。一回目はかわいそうだと思ったのと、借金を勉強させようと思い、100 円を貸してあげて、ノートを買わせました。

ご丁寧に返済計画表まで作りました。半年かけて 100 円返済させました。借金を返している時は、『借金があるから好きなお菓子が買えない』と言っていました。でも、それが終わったら、また使い込みをしました。そしてまた同じように『お母さん、僕、借金する！』と明るく言うてくるわけですよ。

本当にお金の大切さを学ぼうと思ったら、無くなって困る経験が必要だと思ったので、『借金はいけません。学校へ行って明日怒られてきてください』と言いました。もちろん、学校へ事情を前もって電話で伝えておきましたが、でも、そこから使い込みはしなくなりました。

参加者 | お小遣い帳はどういうものを使っていたのですか。

住山 | クリアブックに、文房具代、お菓子代というように費目ごと分けて、そのままお金を直接入れて管理するようにしていました。そこからお金を出していく。

参加者 | 紙に書くことはしないで。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

住山 | 紙には書くことはしていません。透明のポケットなので、今いくらか、お金が見えるようにしています。

参加者 | スイカとか電子マネーは使ったりしますか？

住山 | 子どもにはまだ教えていません。今、どうやって教えたらよいか課題です。ただ、現金を使って、まずは感覚を身につける。量感というか、減る感覚を身につけるといのが大事なのではないかと思っています。あとは予算というものがあるということです。

参加者 | 習い事に行く時に、子どもには子ども専用のスイカを持たせています。一ヶ月千円とか金額を決めて持たせていました。すると、コンビニのお菓子をスイカで買ってしまい、一ヶ月もたらずに無くなってしまいます。習い事に行かなければならないので、またチャージをしないといけない。それが習慣になってしまい困っていました。今のお話を聞いて、交通費ということで現金を管理した方がいいなと思いました。

岡本 | 『お小遣いの決め方をどうしたらいいのでしょうか』ということをよく聞かれますが、それはどうでしょうか。

住山 | やはり必要なモノと欲しいものときちんと分けること、ここがお金のやりくりだと思っています。保護者の方にお伝えすることは、まずお子さんに買ってあげているものをひたすらリストアップしてもらい、それがいくらなのか書いてもらいます。その中で、何を子ども本人に管理させるのかというのを決めて、その金額の合計がお小遣い。その中には必要なモノと欲しいもの両方を含めます。本人に判断をさせるので人それぞれ違います。

岡本 | それでは本人との合意に基づいて金額を決めて、この部分とこの部分で分けて使っているということですね。

住山 | そうです。だんだん本人の能力に応じて金額を増やしていく。

岡本 | 範囲を広げていく。

住山 | そうです。今、私は本人に全部任せて管理させている感じです。一週間 300 円から始めましたけど、今は月 1 万 5 千円渡しています。その中には、制服の貯金から学校指定用品から散髪代、衣服代まで全て含まれています。

岡本 | 自立できますね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

住山 | そうなんです。料理もできる子なのでごく助かっています。

住山 | 障害のある子たちにとって、1円玉5枚と5円玉1枚が、見た目も量も何もかも違うので同じだと言ってもわかりにくい。あろうことか、5円玉だけ数字の5ではなくて漢数字の五なのです。学校では、最低でも足し算と引き算ができないと無理だとか、100まで数えられないとお金は無理と思っていますが、この5円玉につまずいて一向にお金の学習ができないんですね。

お金を10まで数えることができ、数字とモノの量が一致していれば、お金は使えるようになっていけます。つまり、一桁の足し算や引き算ができなくても、お金は使えるということです。頭の中でモノの量を把握しているだけだから。5円玉も5であるとパターンで教えています。今このパターンを覚えるアプリを作りました。最近、リリースされたばかりです。子どもたちはお財布からお金を探すことが難しいので、コインフォームに金種ごと分けて入れます。コインフォームは振ってもお金は落ちません。一枚ずつ簡単に出すこともできます。これでお金を使える練習をしていきます。お金を食べてしまうような重度な知的障害のお子さんも、10ヶ月間、これを使って練習したら、一人で金額を見てレジでお金が払えるようになっています。

参加者 | 5円がわからないお子さんも、トレーニングをすればできるようになりますか？

住山 | 最初は、まず使えるようになるトレーニングをして、その次に両替の意味を教えます。両替は私の中ではできてもできなくもどちらでもいいと思っています。できたら便利になりますが、できなくても買い物はできますから。

参加者 | このような教育は何歳くらいが対象ですか？

住山 | 基本的には小学生以上を対象にしていますが、障害のある子どもたちにとって年齢はあまり関係ないですね。それよりも知的理解度で、私たちのところでは、10まで数えられるお子さんを対象にしています。大人は、ゆったり見守る気の長さや、心構えが最も必要ではないのかと思います。それが難しいのであれば、私たちのようなプロが入って、きちんと教えていくというのが大事だと思います。

岡本 | 本当に意味のある大切なお仕事だと思います。ぜひこれからも頑張ってください。今日はどうもありがとうございました。